

「主はわたしに与えられた分、わたしの杯。主はわたしの運命を支える方。測り縄は麗しい地を示し、わたしは輝かしい嗣業を受けました(詩編 16:5~6)」。

たくさんの恵みを戴いている感謝なのか、詩人は今、充足の内にある。とはいえ「いつまで、わたしの魂は思い煩い、日々の嘆きが心を去らないのか(13:3)」と苦しみの日もあった。「主よ、正しい訴えを聞き、わたしの叫びに耳を傾け、祈りに耳を向けてください(17:1)」と訴える日もあった。

詩人は神に対して、己が日々を率直に述べる。

人は、暮らしに満足していることもあれば、自らの境遇に苦しむこともある。戦争や飢餓や陰湿ないじめで、わずかの安堵さえない過酷な状況に陥ることもあるだろう。

詩人が「測り縄」で得た麗しい地は、どれほどの沃野であっただろう。隣人と比べての満足感ではないんじゃないか。「主はわたしに与えられた分、わたしの杯(16:5)」という謙虚で、独立的で、率直な感謝ではないだろうか。

謙虚な独立性をもたらす根拠は、この詩編の両辺にある。一つは冒頭の「神よ、守ってください。あなたを避けどころとするわたしを(16:1)」。「避けどころ」とは「依存する」という意味。

依存というと「ナニナニ依存症」というマイナスイメージがあるが、ある神学の先生は「信仰は神への絶対依存の感情である」と喝破し、一様に承認されてもいる。信仰は神への「依存=信頼」。

もう一つは結びの「わたしは御顔を仰いで満ち足り、喜び祝い、右の御手から永遠の喜びをいただきます(16:11)」。

その依存(信頼)に伴う永遠性。これらが、信仰者の慎ましい日々を、嗣業として輝かせる(16:6)。

「愛する人たち、わたしたちは、このような約束を受けているのだから、肉と霊のあらゆる汚れから自分を清め、神を畏れ、完全に聖なる者となろう(IIコリント 7:1)」。「このような約束」とは何か。

「わたしは彼らの間に住み、巡り歩く。そして、彼らの神となり、彼らはわたしの民となる(6:16)」。  
この「約束」がまず先にあるゆえに、約束に「依り頼む(依存)」がゆえに、「肉と霊のあらゆる汚れから自分を清め(7:1)」、私たち自身が一步一步「生ける神の神殿(6:16)」になっていく。

表象が何かと大袈裟だが、俗なる私たちが果たして「完全に聖なる者(7:1)」、「神の神殿」になれるのだろうか。

ただ間違えないでほしい。私たちが「自分を清める(7:1)」ために、世の不法や闇(6:14)、ベリアル(邪悪/サタン)や不信仰(6:15)、偶像(6:16)を裁くのではない。ましてや「信仰のない人々(6:14)」を除外するのでもない。

神の「約束(7:1)」が私たちが神に「帰属」させ、「生ける神の神殿(6:16)」となっていくその過程で、汚れは自ずと剥がれ落ちていくのだから。裁き手になりがちな己が義に要注意。

神の神殿へ至る道は、私たちが努力精進する道ではない。清め、聖とされる主体はキリストなのだから。

「神を畏れ(7:1)」は、努力の類で聖性を掴もうとする傲慢さを打ち砕く。私たちは洗礼を受け「このような約束(7:1)」を足場に、霜柱を踏むように足の裏で約束を確かめつつ、キリストの義なる道を進む。「このような約束(7:1)」を一步一步踏みしめていく生涯全体が、「聖化」ではないか。

聖化の道は、謙虚で独立的だ。「わたしの杯(詩編 16:5)」は私にとって十分な恵み(IIコリント 12:9)。



#### 《おまけのひとこと》

ヘブライ起源の時間観は直線的 インド起源のそれは循環的と言われている 実際には両者共に複合している 私の実感は螺旋状の上昇 一周すると故郷は間近だが離れている 上部の循環は早い